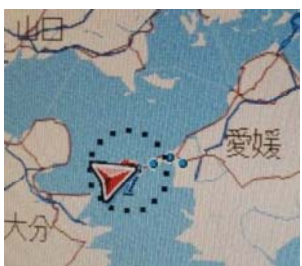


いつもありがとうございます。きしゅう会計の名倉です。先日煙樹が浜付近くをジョギング中に聞こえてきたのが、蝉の鳴き声。まだ5月になったばかりなのに早いものです。さて、こちらもちよ

と早いのですが、4月の初めにお墓参りにいってきました。僕は大阪生まれの大阪育ちなのですが、両親がともに愛媛の三崎町出身。子どもの頃、毎年夏休みのほとんどをその町にある父親の生家で過ごさせてもらいました。(ここの親戚のおばちゃんには大変お世話になりました (^\_^)) この三崎町。最寄の駅まで約 40kmの片田舎。当時は四国なのに大分テレビとテレビ大分しか映らない愛媛の西の端の海辺の町です。毎年

年、海あり、山ありの子ども遊びを満喫し、夏休みが終わって大阪の父母のところに戻ると、すっかり親の顔を忘れ、親に対して人見知り



して、ホームシックになっていたそうです(本当)。それくらい馴染みのある思い出深い大好きな故郷なので、岡山出張の際、ついつい寄ってしまいました。そう片道 300KMの寄り道です(笑)。僕はそんなに信心深い方ではないのですが、今回のお墓参りはちょっといつもとは違う心境になりました。というのも、岡山で滞在したホテルでたまたま読んだ本「母さんのコロッケ(喜多川泰著)」がお墓参りをする前に読むにはうってつけだったからです(最近とにかく喜多川泰氏にはまっています。すでに8冊読みました。あと数冊で全作品完読です(^\_^))

「母さんのコロッケ」うーん、正直タイトルは損をしているような感じがするのは僕だけでしょうか、、、内容をよく表さず、誤解されるようなタイトルっかな、、、サブタイトルの「懸命に命をつなぐ、ひとつの家族の物語り」こっちの方がいいですが、そうするとちょっと重いような、、、そんなことより内容です。少しだけSFっぽい設定で、主人公秀平が「ルーツキャンディー」なるものを手にして、



自分の父母、祖父母、その兄弟の人生のターニングポイントとなるシーンをタイムスリップして立ち会っていくという

ストーリー。読んでいて気づいたのですが、誰でも「自分という存在」は繋がれて来た「命」の「今」なのです。今の日本では歴史の渦に巻き込まれての死を直面するようなことはありませんが、一世代、二世代前に遡るだけで、いまのような平和な時代と異なる、生きるために命をかけて戦った時代になります。(ほんの数十年前のことなのですね)。また日本から離れたら今でも戦争等に巻き込まれ、理不尽に命を落とすような国が世界にはたくさんあります。そう考えると、今ある命を、自分の時間を大切にに使わないともったいない、申し訳ないといった気持ちになります。子々孫々「繋いでくれた命」そういった局面をこの本のように、リアルに体験し、実感し、心に刻み続けられれば、誰しも人生が変わるかも、、、いえ変えるかも知れませんが、逆かというとそれを知らない、忘れちゃうか



ら、「あーあぁ」といった時間の使い方をしてしまうのでしょうか、、、この本を読み、僕自身大きく反省しました(-\_-)。「人生は「ルー競争」なのかも知れませんが、繋がれたボタン(命)は繋いでくれた人の気持ちも大切にしなければいけませんね。今回、こういう気持ちで望んだので、いいお墓参りができたと思います。「ちゃんと生きよう！」って思いを強くさせる一冊です。

それから、生まれきた命。赤ちゃんはいくつもの使命を持って生まれてきているというくだり。そして生まれてきた時に、そのうちの1つの使命はすでに果たしているそうです。そう言えば、初めて子どもが生まれた時にその使命を果たしてくれてたわな。と懐かしく思い出しました。(ここは、この本のキーワード。詳しくは書きません。あしからず(^\_^))



この夏お墓参りする予定のある方、是非事前に読まれることをお奨めします ☆☆☆☆☆ さて、お墓参りをすませて、田舎のおばちゃんにみかんをいっぱい貰って帰路！ってのはもったいないので、2つめの寄り道。愛媛に住む従兄妹と高知にいつてきました(これで四国4県制覇。つまり初高知(^\_^)v)。高知と言えば、龍馬、カツオのたたき、はりまや橋、桂浜水族館、ん、(@@、桂浜水族館???)

桂浜といえば↓この風情ですがちょうど写真のこの辺りに↓



上の水族館があるのです。水族館フリークの僕としてはこれは見とかなきゃと、入場。桂浜の水族館ならではのものをないかと探したとこ



ろ、あった、ありました。龍馬がアカメ(四万十川で有名な赤い目をした大きな魚)を抱えた



「顔はめ看板」迷わず記念撮影！しかし、土地のものならなんでも組

み合わせたらええんやないかいつてのりは如何なものかと思えますね。和歌山でたとえと、「くえを抱えた暴れん坊将軍」ですよ(笑) そうそう、もちろん龍馬像ともお会いしてきました。龍馬が見ていた太平洋を眼下に「日本を今一度、洗濯いたし申し候！」をチーズのかわりに記念撮影！ちょっと長めで語呂の悪い、「ハイチーズ」となりました(笑)



そして、高知の夜はやはりカツオのたたき！ここ 10 年くらいの流行だそうですが、

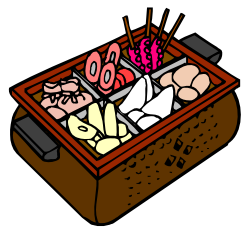


ポン酢ではなく、「しお」で食べる「塩たたき」というのがメジャーとなっているとのこ

と。そして、お酒は高知のお酒、船中八策！幕末とは違いますが、TPPなどの経済戦争。大攘夷でいくのがいいか、小攘夷でいくのがいいか、今一度塾考する時なのでしょう。それはそうと、知らなかったのですが、龍馬記念館で見た歴史解説。高知出身のジョン万次郎って、日本に戻ってきて勝海舟がアメリカに視察に行く際に通訳として同行してたんですね



さて、美味しいカツオ、美味しいお酒を頂いた後は、従兄妹はホテルに戻り、一人スナックの時間です(出張先ではよく現地のお話を聞こうと、ゆっくりママと話ができそうな場末系のスナックに行くのです)。ところが、この日はそれっぽい店が



なかったの、赤提灯に釣られておでん屋さんにおばちゃんが1人でカウンターにいてお客さんは誰もいない話をするにはうってつけです。奥の厨房

には、見えませんがご主人が洗い物をしている様子。「高知の景気はどうか？」なんて世間話をしていたところ、目に入って来たのが、冷蔵庫の横のマラソン大会のゼッケン。「あれ、走られるんですね」とマラソンの話になったところで、奥からご主人の登場です。共通の趣味があると話は盛り上がりますね。暦の長いご主人に市民マラソンの歴史を教えてくださいました。「ちょっと前まで、陸連に登録していないと参加できなかった」「制限時間が3時間30分なんて大会ばかりだった」など等、今の状況からすると驚きの歴史です。有森裕子さんがオリンピックでメダルを取った時期を境に、気軽に参加できる市民フルマラソン大会が増えてきたそうです。また、世界的に見ればジョギング



やマラソンは、ケネディー大統領が「強い国造りをするためには、国民の健康で強い身体造りが必要」とジョギング等を推奨したところから始まったらしいです。まだまだ暦も浅く、「なんちゃってランナー」の僕にとってはとても勉強になりました。そしてこのご主人、フルマラソンに留まらず、100kmのウルトラマラソンも何

度も完走されているとのこと。「フルマラソンでサブ4(フルマラソンを4時間以下で走ること)が目標です」なんて僕がいうと「誰でもできるよ」とご主人(^^)。フルマラソンのベストは3時間15分だそうですが、



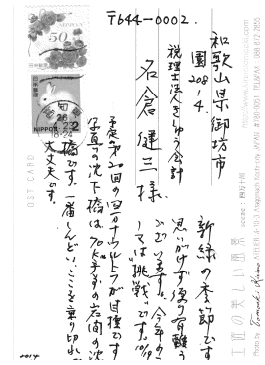
時間制限3時間30分の大会では遅い方だったとのこと(笑)。市民マラソンへの参加の敷居を低くした分、参加者が無意識に人間の限界を低くしてしまっているのかな、、、人間が持つ本当の強さを確かめるため、僕もウルトラマラソンに挑戦しよう、そしてやるからにはサブ10(100キロを10時間以下)を目指そう!と誓いました。そうすれば、サブ4なんてただの通過点ですもんね(^^)

その後、ご夫婦のお子さんの話になり、息子さんをご結婚されて、子どもも生まれて、、、と幸せな話かと聞いていると、「ただねえ、、、息子まだ子どもの顔みてないんよ。今、単身で海外にいてるんよ」との展開。よく聞いてみるとドラマティックで素敵なお話でした。上場会社に勤めていて社内恋愛で結婚した息子さん。結婚後、JICA(国際協力機構)のボランティアに参加すると、奥さんともども退職。息子さんは青年海外協力隊としてミクロネシアへの赴任が決まったあと、奥さんの妊娠を知ったそうです。出産は日本を離れた後だった。「息子さん遅くなったでしょうねえ」というと、「そりやもう!」とご夫婦で



照れることなく即答。今年2年の任期が満了するので、一回は現地の息子を見なさんと、少し前に会いに行かれたそうで、ノータイムで、謙遜する間もなく、遅くなった息子さんの姿が頭に蘇っていたのでしょうね。1度しかない人生。う

ちの息子も「青年海外協力隊に参加したい!」なんていってきたら喜んで行かせたいですね。また今のJICAには「シニア海外ボランティア」もあり、リタイアされた多くの方が参加されているようです。青年でなくなっている僕ですが、こっちならまだチャンスがありますね。たまたま入ったおでん屋さんでしたが、それぞれ色々なドラマ



があるんだと、旅先でいつも感心してしまいます。和歌山に戻り、お礼状を送ったんですが、そしたらご主人から絵葉書が送られてきました。「今年のテーマは挑戦です。10月にある四万十ウルトラマラソンにでます」

今年64歳のご主人。僕らまだまだ老け込む年ではありませんね。がんばります!(^\_^)

## Facebook で見つけた伝えたい話 10

### 「金銀財宝よりも」

あるところに、ひとりの貧しい農夫がいました。この農夫は水飲み場に行くたびに、水に映る自分のみじめな姿を見てため息をもらしていました。(こんなに生活が苦しくっちゃ、幸せなんかとても手が届かぬ...) その日もいつものように水のみ場でため息をもらっていると、あまりにも悲しくなって涙がこぼれ、水に落ちました。すると突然、水の精が現れたのです。



「ずいぶんと悲しいようだねえ」と水の精は言いました。「あなたの欲しい幸せってどんなものなんだい? 試してみな。そのとおりにしてやるからさ」農夫は勢いこんで望みを並べたてました。お城に住んで、庭には魚も泳ぐよ

うな大きな池があって、金銀財宝に囲まれて、きれいな服を着て、、、。「これが全部かなえば、もうまちがいなく幸せになれるよ!」「よく考えなよ」と水の精は言いました。「急がなくてもいいんだから、よく考えてからにしろ。おれが消えたら、もうそのあとで望みを変えることはでき



ないんだぜ」そこで農夫はよく考えて、ダイヤモンドの装身具、見渡す限りの土地、小麦粉がどんどんあふれてくるような立派な水車(なにしろこれがあればもう飢える心配はありません)などを追加しました。「最後にもう一度よく考えるんだな!何か忘れちゃいけないかい?もうすぐおれは消えるぜ」農夫はもう何も思いつきませんでした。そこで「そんなら、土地をもっと増やして、、、王さまよりも広い土地を頼みます」と言っただけでした。「そう言うのなら、ま、お望みどうりにしますかね」と水の精は残念そうに言いました。さて、水の精が消えたらと思ったら、農夫はもうお城の中にいました。まわりには金銀財宝が積みあげられ、窓から外を見れば地平の果てまで豊かな土地が広がっています。けれども、農夫のそばにはだれもいませんでした。妻も子どもたちも、友人たちも、、、。農夫はひとりぼっちになってしまいました。まったくのひとりぼっちに、、、(涙が止まらないより)

### <名倉コメント>

物質的なものってどれだけ揃っても、道具が揃うだけなんですよね。その道具をいっしょに使って、いっしょに幸せを感じられる相手がいないと、あればあるだけ寂しくなるだけかも知れません。家族がいて、友達がいて、仕事仲間がいて、気がついていないだけで、実はとっても幸せに囲まれているのかも知れませんね。